

特殊条件に応じた発進・到達事例及び 既設構造物への直接到達の計画

キーワード

泥濃式推進工法，障害物探査，既設構造物到達

梁 炫 民

YANG Hyeon-min

ジャット協会



1. はじめに

近年，局所的大雨（ゲリラ豪雨）などによる浸水対策として，比較的大きな大中口径管（ $\phi 2,000\text{mm}$ 以上）を雨水貯留管渠に接続する計画が増加している。雨水貯留管渠は都心部を中心に計画されていることが多く，周辺環境などの様々な条件により，到達立坑の築造が困難であることから，既設マンホール部や管路部に接続する計画も増加している。発進立坑についても，極小範囲での施工が求められるケースが多くなってきた。

本稿では，既設シールド管に直接切削し，到達した事例と極小発進立坑から同じ既設シールド管に接続した二つの事例を紹介する。

2. ミリングモール工法による接続

2-1 概要

地中障害物対応型泥濃式推進工法による直接到達
呼び径：2200

推進延長：L = 101.52m

土被り：12.64～12.77m

地下水位：GL - 1.28m

N 値：9～23

発進：鋼矢板9,000×6,600mm

到達：既設シールド $\phi 3,750\text{mm}$ （仕上がり内径）

当現場は泥濃式推進工法にて呼び径2200の推進管を既設シールド管（仕上がり内径 $\phi 3,750\text{mm}$ ）に接続させる設計である（図-1，2）。

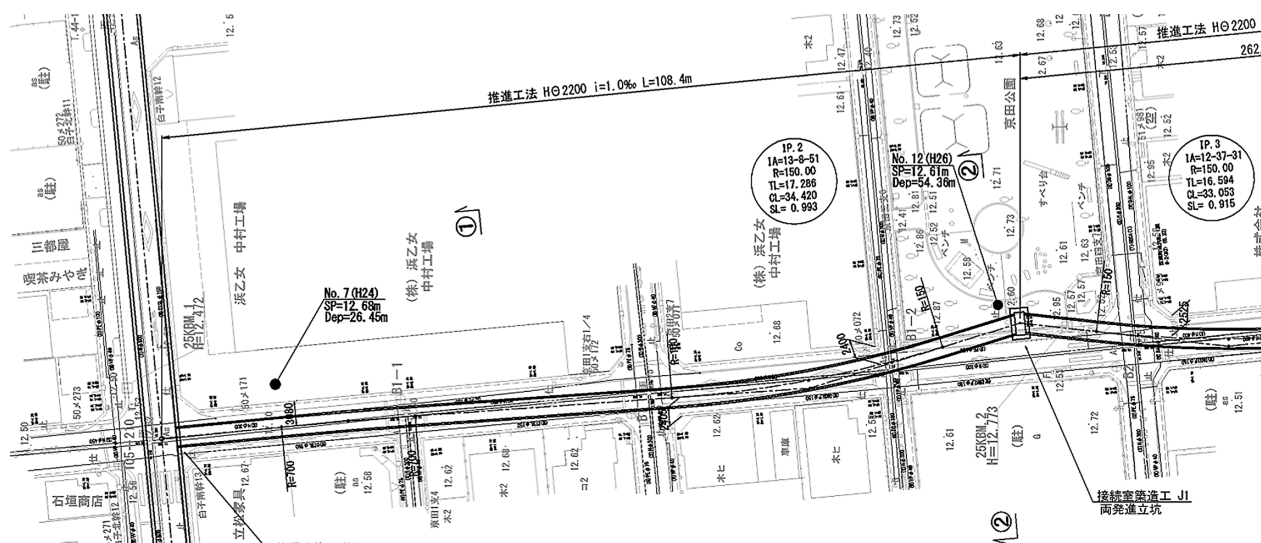


図-1 概要図